Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

Vol.29
2010

ヒバクシャ医療国際協力通信

CONTENTS

■ベラルーシ共和国から医科大生を招へい
■チェルノブイリ・カザフスタン関連諸国医師へヒバクシャ医療研修
■核兵器禁止平和建設国民会議が活動助成金を寄附
■東京シンポジウムについて

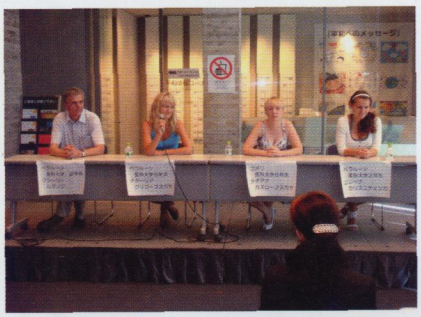
▲ 市民・県民との交流会に参加したベラルーシ共和国からの医科大生（左は司会の高村教授）

ベラルーシ共和国から医科大学生を招へい

(ナシム)蒔本会長を表敬

チェルノブイリ原発事故の影響によって甲状腺がんを発症し治療（手術）を受けた経験を持つベラルーシ共和国の医科大学生を長崎に招聘して、８月２日から８月12日までヒバクシャ医療研修を実施しました。NASHIMでは2006年にチェルノブイリ事故20周年記念事業の一環として同様の境遇を持つ医科大学生に対して受入研修を実施しましたが、彼らのように被ばくによる健康障害を持ちながら医師を目指して頑張っている若者に、今後のヒバクシャ医療を担ってほしいという期待を持って、２年前に続き今年度も研修を実施しました。

来崎した４名（医科大生３名、随行１名）は、長崎大学の原爆後障害医療研究施設や長崎大学病院で専門知識を習得したり、日赤長崎原爆病院や恵の丘長崎原爆ホームなどへの視察訪問を行い、また、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館が行う被爆者健康講話へも参加して受講者へ自らの経験を語るとともに、被爆者と意見交換を行いました。８月９日には平和祈念式典へ参列し、長崎原爆被爆者のご冥福をお祈りしました。真夏の暑い盛りでしたが異国の地でヒバクシャ医療や原爆被爆の実相について学ぶ機会を得、普段できない多くの経験をして強い印象とともに帰国したことと思います。



被爆者健康講話で話す医科大生

Natallia Kulikouskaya （ナターリャ・クリコーフスカヤ）
国立ベラルーシ医科大学　予防医学部5年生

「日出ずる国」日本に滞在した10日間は毎日がとても濃密なものでした。甲状腺がん全般、長崎の原爆後遺症やチェルノブイリ事故の影響、被ばくの影響、甲状腺がんや白血病の最新の診断法や治療法などのテーマで充実したレクチャーを受け、原爆資料館や医療ケアの充実した原爆養護ホームも見学させていただきました。

また住民健診の現場も訪問しました。そこでは身体計測（メタボリック症候群の検査）、血液検査、胸部レントゲン、造影剤による胃腸透視、骨そしょう症の検査、咀嚼力検査、動脈硬化や甲状腺のエコー検診などが行われていました。私自身は、甲状腺エコー検診のお手伝いをさせていただきました。このような健診が行われることによって悪性腫瘍を含む様々な疾病の早期発見が可能となっていることを実感しました。日本人はこういった健診を自発的に受け、自身の健康を管理していることを目の当たりにしました。

内分泌系の患者さんの外来や外科手術を見学する機会もあり、自分にとって多くの発見がありました。今後の勉学、さらには医療従事者としてのキャリアにおいて、この滞在で得たことを生かしていくつもりです。

平和祈念式典に参列

Alena Kalisnichenka （エレーナ・コリスニチェンコ）
国立ベラルーシ医学大学　予防医学部2年生

日本は、高度に発達した技術力と建築のミニマリズムと生活のすべての面で秩序が守られている国です。私は、この素晴らしい国を訪れる機会に恵まれたことをとても幸せに感じています。この国のすべてが好きになりました。会う人ごとに微笑んでくれる人たち、清潔で秩序の整っている通りや建物、美しい自然環境、高いレベルの医療サービス…。

日本のドクターは患者さんが不快を感じないように、治療が心地よく適切なものであるように最善を尽くしています。素晴らしいことだと思います。私は帰国後、高度な技術を持つ日本の医療サービスがどのように行われていたかについて、多くの人に語ることによって、少しでも自国の医療の質を向上させたいと思います。

病院の訪問も私にとっては非常に興味深いことでした。健診にも参加する機会があり、お手伝いをさせていただきました。市民ひとりひとりが定期的に健康診断を受けることは、国民生活の健康水準向上のために非常に大切だと思います。病気が早期に発見され、早い段階で治療を開始することができるからです。また、私たち自身の検査をしていただいたことにも感謝します。ベラルーシよりもかなり高い測定精度をもつ医療機器で検査していただいたことにより、私たちの健康に問題がないことに100%自信をもつことができました。

片峰長崎大学長を表敬

Tatsiana Kazlouskaya（タチアナ・カズローフスカヤ）
ゴメリ医科大学　４年生

日本は、私たちの国とは様々な点で異なります。すべてのことに感動しました。美しい自然、とてもやさしい人々、美味しい料理…。高レベルの医療は特筆すべき驚きでした。日本に行く前にも、平均寿命が高く新生児死亡率が低いなど、日本は多くの点で医療レベルの高さを裏付ける健康水準を誇っていることは知っていました。しかし、私が長崎で見たことは、自分が本で知っていたことを上回っていました。日本の見事な医療システム、医師だけでなく看護師のみなさんも高い知識と豊かな経験・技術をもっていることなどを目の当たりにしました。医療従事者が一人一人の患者に対して、とてもあたたかい心配りをもって接していることにも感動しました。

日本での滞在期間中に、今後の勉強、そして医師のキャリアにおいて有益になるであろう多くのことを新たに学ぶことができました。手術見学も大変印象に残りました。内視鏡を利用した胃切除手術は、ベラルーシではまだ教科書にさえ記載がありません。

被爆者の話を聞く医科大生

原爆資料館も見学しました。戦争がどのような悲惨な結果をもたらすか、世界各国が兵器の開発を進めることがどんなに恐ろしい過ちを引き起こす可能性があるか、について世界の人々が忘れないようにする役割をもつ資料館の存在はとても大切なものだと思いました。また、あえて自身の辛い体験について語る被爆者の勇気に私は感嘆せずにはいられませんし、被爆者に対する行き届いたサポートを忘れない日本国民にも敬意を表します。

受入研修事業

チェルノブイリ・カザフスタン関連国医師へ ヒバクシャ医療研修

(ナシム)蒔本会長を表敬

チェルノブイリ原発事故周辺諸国やカザフスタン共和国で放射線被ばく者の治療にあたる医療従事者に対して指導や医療情報提供を行うため、今年度も６名の医師を招き、ヒバクシャ医療研修を行いました。研修者は７月21日から約40日間に亘り長崎に滞在し、長崎大学を中心とした専門研修において、日本の最新医療を学びヒバクシャ医療分野で共同研究を行う関係者との交流を深めました。

また、長崎原爆資料館を見学し平和祈念式典へ参列するなど長崎原爆の実相について学び、日赤長崎原爆病院や放射線影響研究所、長崎市原爆被爆者健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホームなどへの視察訪問を通して、日本の原爆被爆者への援護やケアについて理解を深めました。

Uliana Rumyantseva（ウリヤーナ・ルミャンツェヴァ）
ロシア共和国　オブニンスク放射線医学研究所
放射線科上級研究者　内分泌学

この研修で私は、長崎大学の各先生方による興味深く内容豊かな講義と大学の実験室・大学病院の臨床施設における実習により、これまで十分ではなかった知識を補うことができた。内分泌、癌、臨床遺伝学を専門とする私にとって最も重要だったのは、甲状腺癌、放射線による癌、発癌機構における分子遺伝学的側面に関する諸講義であった。

長崎の被爆者とチェルノブィリ原発のヒバクシャは、異なる線源（プルトニウムとヨード）と作用（外部被ばくと内部被ばく）による被ばくではあるが、これらの被ばく者の回復や、分子生物学的に見た被ばく後障害に関する関係諸国の経験の交換は、学術・実務において、大きな意味合いを持っている。ここで得られた知識は、癌、放射線、遺伝学、内科の専門家である我々にとって、間違いなく有益なものである。我々の重要な職責は、チェルノブイリの事故によるヒバクシャの様々な疾病を治療することであり、そのため日本の被爆者に対する医療サービスのシステムや、先進的なハイテク治療・診断の手法、また最新の分子生物学の業績について知ることは、実務的にも研究的にも興味深かった。特に、特筆すべきは原爆の爆風、熱線、放射線による様々な影響を受けた人々の治療と回復のプロセス作りが進んでいることである。

(長崎大学)松山医学部長を表敬

研修の合間には、限られた時間の中で日本の文化や伝統をできるかぎり知ろうと努め、いくつかの神社仏閣、浦上天主堂、グラバー園、出島などの名所旧跡を見て回った。また稲佐山の展望台や17世紀に造られた古い橋の辺りを散策し、特にめがね橋に感銘を受けた。また日本の歴史と文化に関する講義も興味深かった。日本は比類のない、独特な国だ。長崎は、親切で笑顔にあふれた、素晴らしい人々の住む美しい街だ。この印象は終生胸に残るだろう。

ウクライナ共和国　Kostiantyn Bazyka（コスタンチン・バジィカ）
ウクライナ医学アカデミー放射線医学研究所
若手研究者　循環器科

長崎滞在期間中、我々は長崎県医師会、日本赤十字社長崎原爆病院、恵の丘原爆ホーム、長崎市原爆被爆者健康管理センター、放射線影響研究所などを訪れ、放射線からの保護、放射線による疾病の診断・治療・予防などに関し、日本の専門家たちの経験を教えて頂いた。また、日本の保健制度についても知ることができ、さらに被爆者たちと交流を持つこともできた。

長崎大学では、以下のようなテーマの講義を受けた。日本の歴史と文化、原爆の後障害、放射線の人体への影響全般、様々な組織や制度、特に日本と世界の放射線安全問題について、医療データの統計的処理、その他多くの講義である。実習は、大学病院の各科で行われた。この期間に各科の業務について知り、カンファレンスや原爆被爆者の治療の特異性についての検討会、教授の回診、外来診察、新しい診断方法の実施などに参加した。

日本に関する全般的な印象は、非常に良かった。日本は古く豊かな歴史を持ち、高いレベルの文化と技術的発展を遂げた国だ。来日前は考え方の違いから日本人とコミュニケーションをとったり一緒に作業したりするのは非常に難しいだろうと思っていたが、2、3日もすると日本の人々は親切で、丁寧で、勤勉で、常に他人を助けようとしている人々だとわかり、話をするのはとても楽しかった。

2010年8月9日に長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列した。ウクライナ医学アカデミー付属放射線医学研究所で、放射線医学およびチェルノブィリ原発事故の被爆患者の病気の診断と治療に携わるスタッフとして、また放射線および放射線医学科のスタッフとして、原爆被爆者の問題は非常によく理解できた。

（原爆病院）朝長院長を表敬

ベラルーシ共和国　Volha Biahun（オリガ・ビャグン）
ベラルーシ卒後医学教育アカデミー
社会人大学院生　眼科

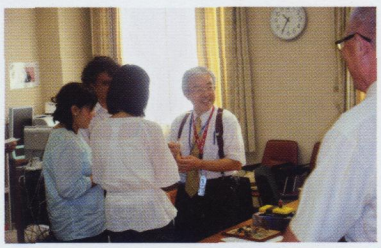
この研修期間中、新しい研究、癌の診断、統計、放射線管理、日本の歴史と文化などに関する講義を受け,医療機関（原爆病院、大学病院、放射線影響研究所）を訪問し、最新の機器を用いた診断や治療の実務を見学した。

また、原爆ホーム訪問時には、1945年8月9日の恐ろしい日を体験された年配の方々への対応や、これらの人々に対する社会的援護に感銘を受けた。大学病院の眼科での実習も、同様に知識を増やしてくれるものだった。ここで私は加齢による網膜の病変の新たな治療（医薬品や手術を用いての）を知ることができ、外来・入院治療もみることができた。病院には最新の医療機器が豊富に備え付けられていることに感心した。また、放射線影響研究所での眼科の外来も見学した。これらの診察記録の完全性と、患者観察の長期性、統計のための情報レベルの高さは特筆に値する。

原爆資料館や爆心地の訪問、8月9日の平和祈念式典、被爆者の証言により、国家間の和平と友好の大切さと、放射線による病気の治療のための研究の重要性を感じた。

研修の合間に、私たちはグラバー園、神社仏閣、出島など、長崎の歴史に触れることができる場所を訪れた。また寿司や刺身、ちゃんぽん、天ぷら、日本茶などの日本食を試した。伊王島では自然、太陽、海を満喫した。

ベラルーシ共和国で放射線の影響に苦しむ人々の診察や治療に役立つ新たな知識を得る機会を与えてくれた関係者の皆様に感謝の意を表したい。



（長崎大学病院）河野院長を表敬

ベラルーシ共和国　Valery Sitnikov（ワレーリー・シトニコフ）
ゴメリ医科大学　副学長　耳鼻科

研修計画、出迎え、ホテル手配、長崎県・市の公的機関の代表者への表敬訪問は、最高のレベルで行われた。研修の基本的な部分を占める講義は、長崎大学の優れた研究者、教授陣により、現代の世界的研究レベルで、視覚的に効果のある教材を使って行われた。講師たちはすべての質問に対し、余すところなく答えてくれた。特に興味深かったのは、医療遺伝学、放射線生物学と放射線による疾病の予防、被爆者に対する精神的ケア、幹細胞移植、日本の歴史と文化などに関する講義である。

原爆資料館や原爆ホームの訪問、また被爆65周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列したことは、強く印象に残った。この日本国民の悲劇を例とし、人類が生き残るための平和の大切さ、またこのような悲劇が二度と繰り返されないためにあらゆる手段をとらなければならないということが感じられた。

大学病院の治療・検査施設を見学したが、病院は最新の機器やコンピュータなどの設備を備えており、検査、内科・外科的治療が世界的に高いレベルで行われ、大学病院の医師たちの職業レベルも非常に高かった。

我々が研修で得た知識は、我々が今後研究や実務を行う上で活用されるであろう。

NASHIMおよび長崎大学のスタッフには、知識を習得させてくれたことに対し、心より深く感謝している。日本とベラルーシの研究者が、今後医学の分野で実り多き研究および実務的協力関係を築けることを信じており、また切望している。

（長崎大学）片峰学長を表敬

カザフスタン　Aiymkul Ashimkhanova（アイムクリ・エシムハーノワ）
国立カザフスタン医科大学　大学院生　消化器科

今日の長崎は、世界に平和を訴える歴史的な街である。私は、原爆被爆者に対する社会福祉のシステムに感動した。原爆資料館では亡くなられた方々のお名前と遺影、悲劇の瞬間に止まったままの時計があった。最も印象的だったのは、命の最後の瞬間まで平和と長崎の人々の幸せを祈り続けた、永井博士の写真である。世界中から人々が集まり、涙した平和祈念式典では、私が子供時代に聞いた、あの鶴と少女の歌が歌われた。

赤十字、原爆被爆者健康管理センター、放射線影響研究所、長崎大学病院、原爆ホームなどを一つに結び付けているNASHIMは、あらゆる福利事業の中で、最も人道的な事業に関係のある活動を行っている。ロシア、ベラルーシ、ウクライナ、カザフスタンといった国々と日本は、放射線による被害という同じような悲劇的な運命で結び付けられており、NASHIMのおかげで私たちは自分たちの国の人々にどのように対応し、放射線による重い後遺症とどのように戦わなければならないかを知ることができ、また研修で得た知識を我が国のすべての国民の援護に役立てたいと考えている。

日本は、私にとっていつでもハイテクの国であったが、それと同時に、発展しながらも自らの伝統と文化を保ち続けている驚くべき国である。研修期間中このことはいつでも、どこでも感じられた。往来を散策しているとき、公共交通機関に乗っているとき、丁寧で笑みをたたえた人々、素晴らしい文化財、伝統的な食事、祭り、筆舌に尽くしがたい自然、海。私は、子供時代に読んだ歴史的な街にいつか行くことがあろうとは、夢想だにしてなかった。

長崎大学病院での講義

私たちは、放射線や最新の癌の臨床疫学、世界の先端的な病院で取り入れられている治療法、長崎大学の研究者や医師たちによる分子遺伝分野での新しい

業績などに関する様々な講義を聴いた。病棟では最新の機器が備え付けられ、熟練の専門家たちが配され、知識と経験を受け継ぎ、患者を救おうとしている多くの後進たちがいて、世界水準の診断と治療が行われていた。私たちを温かく迎え入れてくれ、自らの知識を分け与えてくれた先生方をはじめとするスタッフの皆様方にお礼を申し上げたい。カザフスタンの国民を代表して、深く御礼申し上げます。

カザフスタン　Marat Syzdykbayev（マラット・スィズディクバーエフ）
セミパラチンスク医科大学　医師　小児気管支鏡検査

長崎での研修は多くの新しい情報が盛り込まれ、知識を増加させる講義を聴講した。核爆発が人体や環境に与える影響、遺伝学、分子生物学、放射線医学、放射線によって引き起こされる腫瘍および様々な疾病、またその影響についてなど、様々な講義と研究についてである。また、同様に知識を増やし、興味を与えてくれる日本の文化と歴史に関する講義も聞いたが、日本人がアルタイ民族の出自を持ち、日本語がチュルク・アルタイ語族に属するという話が印象に残った。

研修は、病院にて専門ごとにも行われた。日本は最良のシステムを持つ国、少なくとも世界で最も優れた保健システムを持つ国のうちの一つである。日本の中ではさほど大きくない市でありながら、これほど独自性を持つ移植や器官埋め込み、その他さまざまな手術が行われているのである。麻酔や集中治療、気管支鏡も最も高いレベルで行われ、多くの新しく有益な知識を増やすことができた。麻酔のために素晴らしい薬剤が使われ、ありとあらゆるハイテク機器が備え付けられていた。非常にホスピタリティーがあり、丁寧で好意的で勤勉で忍耐強い日本人は、信じられないほど完全志向が高い。非常によく働き、チームワークがあり、エゴイズムを生むライバル意識は見当たらなかった。見るもの聴くものただ喜びと感動のみだった。素晴らしい国、素晴らしい人々！すべてが素晴らしく、丁重に迎え入れられ、心配りを受け、細部にいたるまで配慮が行き届いていた。本当にいつかまた、この日出ずる魔法の国を再訪したいものだ。私の個人的な望みは、この国で個展を開くために来訪し、日本とカザフスタンの文化的交流と相互発展に寄与することである。また、可能であるなら、麻酔科医、気管支鏡専門家としての専門訓練（気管支鏡手術、レーザー治療）を受けたい。

長崎市健康管理センター

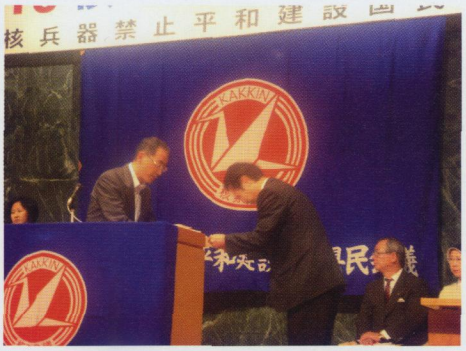
藤井副知事を表敬

智多副市長を表敬

放射線影響研究所での講義

歓迎レセプション

核兵器禁止平和建設国民会議が活動助成金を寄附



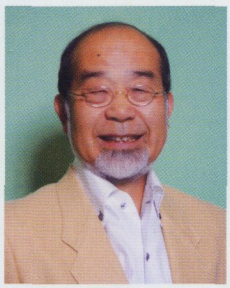
今年も核兵器禁止平和建設国民会議（核禁会議）に寄せられた浄財を活動助成金としてNASHIMに寄附していただきました。核禁会議は1961年に結成され、核兵器廃絶、被爆者援護、平和建設のための積極的な活動を行っている団体ですが、活動の一環である被爆者援護運動として長年にわたりカンパ活動を実施し、多くの医療施設等へ検診者、車椅子、ベッド、医療機器等を贈呈しています。NASHIMへも毎年活動助成金を寄附していただいており、いただいた助成金は医学教科書の出版等に役立っています。

贈呈式は８月７日に長崎原爆資料館で執り行われ、NASHIMからは久村事務局長が出席して、社会福祉法人恵の丘原爆ホーム等の９団体と共に贈呈を受けました。

核禁会議のこれまでの被爆者救援活動や核兵器廃絶の取り組みに深く敬意を表しますとともに、改めて厚く感謝申し上げます。NASHIMとしましては世界のヒバクシャ支援のため、この活動助成金を有効に活用したいと考えております。

東京シンポジウムについて

日時：平成22年12月18日（土）午後２時～午後４時30分
場所：東京都千代田区丸の内２－５－２　三菱ビル　10階


鎌田 寛 先生

山下 俊一 教授

NASHIMでは、これまでに長崎が培った放射線に関する知識と最新の放射線医療を世界のヒバクシャ救済に役立てるため、様々な活動を行ってきました。こうしたNASHIM の活動を多くの方々に知っていただくとともに、世界平和への貢献を期し、**「核に汚染された大地を歩いて－チェルノブイリ・カザフスタンが語り続けるもの－」**をテーマに東京でシンポジウムを開催します。

講演者は、鎌田實先生（日本チェルノブイリ連帯基金　理事長）と山下俊一教授（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科　科長）です。

会場の都合上、先着150名までとさせていただき、後日整理券を送付いたします。

お申し込みは、ナシムのホームページ（http://www.nashim.org/jp）、又はナシム事務局（電話 095-895-2475 長崎県原爆被爆者援護課内）にお願いいたします。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
第29号
発行／平成22年10月20日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）
〒850-8570　長崎市江戸町2-13（長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課内）
TEL 095(895)2475　FAX 095(895)2578
http://www.nashim.org/